

H6.2.6(日)
→

次々来 何と何と云い

何故か(3)

録2-89^p

5,300^p 云274^p

大蔵 云274^p

(2)

焚書

↑↑次にすべきは、

口古事記以外以外の書物書物という書物書物全全てを、

一つ残残らず茶毘茶毘に付付すことであつたかも知

れな

■全国全国の貴族・豪族・社寺・官衙等々から、

手当り次第手当り「根こそぎ」掻き集められた書籍は

朝廷の倉である大蔵の中へ厳重に「まい入

れ、数十年もの長きにわたって保管され続け

てきた」とではなかつたらうか。

■ところが、元正天皇の養老五年(七二一)

二月十五日、この大蔵・諸国から納められ

た調・庸の物を入入る蔵に異変が起起った。

「大蔵省倉自鳴有聲」

大蔵省の倉「自ら鳴りて声有り」

と続日本紀はいう。

・あるいは、これまで静かであつた蔵に、こ

の「なぜか」怪しい気が流れ、大蔵の戸が

開き、山と積まれた書籍が忽然として消えた

の「かも知れない」。

「恐らく、蔵の床は、一歩で踏まれた時、自ら鳴った」

H6.2.8(火) ④
→

おはば
青 紀下198'

5,301 P

景 小井480' 日景 .. 468'

かき 電 景 太の周囲と見える光の輪 6K 紀下198' 89'

の
であらう。
（*床が下「自ら」鳴ったのだらう）
そして、次の日の二月十六日条に、
「日暈如白虹貫南北有珥。云々」
13.5
「日暈如白虹貫南北有珥。云々」
北に珥有り云々」
とある。（続紀）
暈は太陽のまわりに見られる一端が濃く他端が次第に淡くなる
暈（光の輪）があった。
天空には日（太陽）があり、日のまわりに
暈（光の輪）があった。
そんな時、
堆く積み上げられ
た書籍の山に火がつけられたのではなからうか？
過
去の全一の事実を焼き尽くすかのよう
に、
火はいっきに燃え上がった。
かなたに、
一筋立ち昇る
白煙は、
まるで白虹のよう
に月弧を描いてゆく。
なお、白虹は、武器を意味する。（「続日本
紀」(二) 日本古典文学大系、岩波書店、八十八
頁 三参照)
矢が弧状に飛んでゆくかのようにも見え
た。白煙は、
何となく、
たどたどしく

林信明「小学館（暈）参照」
ほんやりのした光や色のことのようである。（「漢和辞典」小

奇しくも 622P

小林 642P 5,302P

必要は

血の気が引く 1431P
白虹貫日 1431P

小林 673P

H元 7/4 (水) 5
14753P

前頁 164P 白虹

やかて 南北方向に、日(太陽)および暈(光の輪)を貫いてしまった。

白虹貫日

無気味にも ながら 白虹(武器)が

太陽を貫くのは、兵乱の前兆とされる。(戦

国策・魏) 漢和辞典 小林信明、小学館

白虹貫日 参照

元正天皇をはじめとする人々の顔から、血

の気が引いていった。

と別の時、誰かが言った。

恐れることはありませぬ。よくご覧いた

たさとう存じます。暈の南北に 珥(11剣の

鍔)のような雲があるではありませんか(漢

和辞典 小林信明、小学館 珥 参照)

なるほど

日(太陽)のまわりに暈(光の輪)があり、

白虹のような白煙が南北に貫いていて、暈の

南と北のそれぞれに細く 相引く雲が浮かんでい

る

のが見えていた。

そうです。奇しくも 車 という字が描

あやうく、

小林 945⁹ 車
中層はAL記の17 公年1446⁹

か水でいるのです。太陽が、車の上にあつて、東から西へ（車の軸と直角の方向へ）天翔（あまがけ）って、いる様子が示されてゐるようであつた。（第534・535図参照）

・そういうば、古来、

「車同軌書同文」
（くるまはきをおなじくし、よはぶんをおなじくす）

は文字が統一されてゐる。つまり、制度がまとめられ、ばらばらでないことへ中庸、

というではないか。（「漢和辞典」小林信明）

小学館「車同軌書同文」参照

・まさに「思想を統一するこの時に当り、天の啓示として、この上もない賛意が表明され、た」ように思へてくるのだつた。

ここに元正天皇は、左右大弁および八省の卿らを殿（内裏内の大内殿か）の前に召見し、詔してこう言われた。

「朕、徳菲薄（うすい）へりくたつたこと（は）にして、民を尊くに明ならず、夙に興（おこ）して（起きて）以て求め、夜に裸（はだか）て（寝て）以て思ふ。身は紫宮に居れども心は黔首（人）民（じんみん）」

（「新書」下巻）

5,303^P 2/2

・頁の上半分に、
大きく掲載
下さい。

(・上下も間違えないで下さい。)
上

車

日

1309

1409

第535図 「車」の象形文字

『楷行草』三体筆順帖典 鈴木啓水、日本書道協会、669頁、

＜車＞参照

1409

第534図 「日」の象形文字

1309

『大字典』上田万年、講談社、昭和60年11月10日、第23刷発行、

1059頁＜日＞参照

H9.6.21(土)
H6.2.9(水)⑤
→

5,304P

2972178
小枝 1052

原文 汝たち
続紀(西)85

極諫 1枚
519

①

に在^あり。卿^{きやう}らに委^{あづか}めること無^なくんは何^{いか}にか天^{あめ}
下^{した}を化^{あも}けむ。国家^{こくが}の事^{こと}、万^{ばん}機^きに益^{えき}有^あらば、必^{かなら}
ず奏^{そう}聞^{もん}すべし。如^{ごと}し納^{のう}れざることあらば、重^{かさ}
ねて極^{きよく}諫^{かん}(手^てきびくさいさめること)を爲^なせ。
汝^{なむ}たち、面^{めん}従^{じゆう}して退^{たい}りて、後^ご言^{ごん}する^{こと}と^なか
れ(おもてむきは従^{したが}いながら、かげでいろ
ろ言^いう^{こと}と^なかれ)
● ↑↑↑元^{げん}正^{しよう}天^{てん}皇^{かう}は、密^{ひそ}かに書^{しよ}を焼^やかせた後^{のち}
に、左右^{さうぶ}大^{だい}弁^{べん}および八^{はつ}省^{しょう}の卿^{きやう}らに口^{くちう}止^{とめ}めして
面^{めん}従^{じゆう}後^ご言^{ごん}(うわべばかり従^{したが}って、^{あつて}か
げでかれこれ言^いうこと)書^{しよ}経^{きやう}・益^{えき}稷^{しやく}をさし
ないうように申^{もう}し渡^{わた}されたのであろう^{と推察}
● 火^ひ書^{しよ}の事^{こと}実^{じつ}は、内^{ない}密^{みつ}にされなければな
らな^いのである。

米

美作 2130
兵庫 1985

三代(後) 449

白①-キ70
白②-31P

5,305

老五年(七二二)の
自鳴る 5300
5311

721
622

100月
1
99

紀下204P
推古30年(622)2月22日

先述のように、聖徳太子が薨去されたのは、日本書紀に記載されている推古二十九年ではなく、翌年の推古三十年(六二二)のことであつたらう、と考えられている。
もはやすでに正実に違ひ、多く虚偽を加えた書である。とみなされた数多くの書籍のうちの一が始めに日成らとなつて消えたのは、聖徳太子薨去の年(六二二)を一年目と数えて丁度百年後の養老五年(七二二)のことであつたかも知れない。
似た記事が散見される。
●光仁天皇不_ふ予_よ(病氣)の時、美作国_{みまさか}吉田郡_{よした}の兵庫や、鈴鹿関城門_{すずかのせき}の太鼓_{たいこ}が自_{おのづか}ら鳴_なた(続紀、天_{てん}心_{しん}元_{げん}年_{ねん}三月二十六日条)。また左右兵庫の兵器_{へいき}が自_{おのづか}鳴_ないた(同元年四月一日条)。
●三代実録_{さんだいじつろく}卷三十五陽成天皇の元慶三年(八七九)三月十六日条に「肥後国_{ひご}菊池郡_{きくち}城院_{じやういん}兵庫_{へいこ}戸_と自_{おのづか}鳴_なとある」とある。
(出入口)

5,306^P

コクヨ ケー20 20×20

5,307^P

中口のあけの25^{かんよう} 咸陽 元508^{かんり} 官吏 元508^{かんり}
儒者 元1063^{かんり}

治を非難するものは一族残らずみな殺しにす
る。今後、学問をいたいと思う者は、政府の
官吏を師とせよ。
と命令を下した。
②さらに、始皇帝は、儒者四百六十余人を咸
陽で穴埋めの刑（坑）に処した。
■これが、始皇帝の思想弾圧として悪名のた
かい「焚書坑儒」である。
●始皇帝のやり方は、あまりにも乱暴だった。
●そのため古代の文化遺産（書籍）の保存に、大
きな損失をあたえた。とは否定できない。
いわれてゐる。
■つまり、秦始皇帝は、思慮が僅かに欠けて
いて、
「焚書・坑儒を行なった」
というその事実を封鎖することになかった。
③「後世、非常に批判をあびること
になったのだった。厳しい
これは、厳然とした歴史上の事実である。
■それでは、

H9.6.21(土)
H6.210(木) ⑤

5,308^P

口塞 633⁺
輸 1527⁺

同又
④ 4104^P

「我が国における焚書について」
どのような対処すべきなのだろうか
■ とう自問自答してみるとき、
答は、
秦始皇帝が陥った轍を踏むとは、どうあ
ろうとも避けなければならぬのである
■ すなわち、焚書が行なわれたという出来
事について、あくまでも、隠し通すこと
とが企図された。
（第七十六章、太子の苦悩
へ焚書✓の項において既述）
（*）
■ もつとも、朝野全ての人々の思想を統一す
るのは、
から、実際には、非常に難いことである
■ 奈良時代から平安時代に至る朝廷は、
疑心暗鬼になって、長年におよぶ厳重な箝口令
を敷き
● 「日本書紀」こそが正しくて、この記述に
合致しないもう一つの書は嘘偽り加えたるの
だ
「日本書紀」の記述に反する思想に対して

「かし」P 10時30分
⑤ 5312 第4行 本日の宿題 ② 269 広1089
↑上

意味

5,310P-1/2

太いゴキに
に下す

「小町」5382-3/9

この序は「文面通り」
になった。それ以来、人々は古を語って口伝
えに伝承するのを好まないようになった。ま
った。実質のない華やかなことのみに競い興
って、そんな世相の中に育った若者達は、
口々に相伝えていた上古の世の人々と同様に
文字の知識を持っていない旧老（老人）達も
た。世は新に更改され、顧みて故実を問う
ても、若者達は根源を識ることもない。
という意味なのであろうか。
そんな筈はあるまい。
ここに、
旧老（老人）を嗤ふ
とある。
つまり、表向き、
へ文字の知識を持つ若者達が、
の知識を持っていない老人達を嗤った。
という意味合いにあらうと解される。

とうてい
到底 5/575

5,310 P-2/2

1884-2/3 親友 43
571-2/6

大化 645年

へ大陸から日本へもたらされた漢字が、わ
ずか数年のうちに数十年のうちにで急激に普及し、
若者達の間でのみ一般化した。短期間
とは到底考えられない。

上古の世以降、長らく文字は無かった。
然るにごく最近、人の一生中の極めて短い期
間内に突然、文字が若者達の間だけで広く
ゆきわたるようになった。

などとは考えにくい。
古語拾遺のこの文章は、奇妙であり、
充分注意して読むべきである。

なお、すでに述べたが、
へ会稽の東冶から渡来した倭人達は、当初
から漢字・吳音の知識を持っていた。

ようと思われる。
第六章へ吳の字を付した言世末
第二十七章へ文字の項において既述
別名 和音とも称される

ト
上
古
大化改新
の世に、
多数の書物が存在していた。
というところが、記紀等の諸文献から分かる。

それなのに、古事記、日本書紀以前の書

天つき
改行

ひんぎゅう
普及 1925

史記

5,309P
5,311P

おひや
かす 319P

5276 1457
22
53656

815
512

と、貴賤老少、口々に相伝えていたのだらう。と思ひ込み勝ちである。

な、これらに正実に違ひ、多く虚偽を加えた書と見なされ、その存在を許されず、密かに抹消されたのではなからうか。

紀四が日本最古の書となつたのであらう。ここに朝廷は、後代の人々の不信の念を除く為、へ上古の世には、文字が一般に使用され、口々に相伝えていた。少、口々に相伝えていた。という。に、考え方の統一をはかうとした。と、想像される。記紀以前に朔り得る書物が無い。のだから、ややもすると現代の我々は、人記紀以前には、文字がまだ普及しておらず、貴賤老少、口々に相伝えていたのだらう。

後代に伝わらない。この書籍は、何といつても不自然である。

基礎を脅かすものである。と、いうべきであり、国家の根本・天皇政治の存在を許されず、密かに抹消されたのではなからうか。

このようにして、自ら口古事記、口日本書紀、口が日本最古の書となつたのであらう。ここに朝廷は、後代の人々の不信の念を除く為、へ上古の世には、文字が一般に使用され、口々に相伝えていた。少、口々に相伝えていた。という。に、考え方の統一をはかうとした。と、想像される。記紀以前に朔り得る書物が無い。のだから、ややもすると現代の我々は、人記紀以前には、文字がまだ普及しておらず、貴賤老少、口々に相伝えていたのだらう。

こんせう
根絶 元848
ねだや

5382P-66

5,312P 4107P

たき
断ち切る

5309P 1087P 記(2)22P 5296P 5326P

邦家の経緯、王化の塙基、(国家の根本・天皇
政治の基礎)とされたと、いうのには、一
「貴賤老少、口々に相伝へ、前言往行、存
ていつたならば、二つの矛盾した歴史が後世
へ伝わることになるう。
人々の口伝による伝承を断ち切る為には、
どうしたらよいのだろうか。
史記(周紀)に下
民の口を防ぐは水を防ぐより甚だし。
敢てこれをなす時は、積怨爆発して大害をな
す
とあり、人々の口を封ずることのむづかし
さが示されてゐる。
しかし、どんなに困難なことであらうと
どれほど多年にわたらうとも、
子へ子から孫へと密やかた口づてに伝えら
る。本来の歴史を根絶させねばならぬことには
それが出来なかつたら

2246
有識 学内が有識が言

5309
5309
5309
5309

5309
5.313
5309

5309
5309

へ真の目的が達成された
う言え
うことにはなら
ないのである。

族・豪族を
はじめとする
有識者達は、
書契(証)

に用いる書きつけ
必然的に、古を
談(はな)すことを
避けるよ

うになつていつた
と推察される。

ところか、日本書紀
を唯一の師として
育つた若者達は、
浮華に溺れ、朝廷の
飲心を買

おうと競いあい
書契(契約)に縛ら
れて押し黙りか
ちな旧老を、

へそんなことも
知らないのか
と嘆いた
さげすみ笑った
のといふこと
なの

かかも知れない。
一か
そうした若者達に、
故実(昔の事柄)

からを
尋ねてみると、
哀しくも情ない
ことに、
根源(物事のもと)
については何も

識ら
ないのだった。
斎部広成は、
物言えぬ世相
の中にあるが

らも、
朝廷の目を
逃れろ
為
精一杯の
擬装を

こらー この当時の真実の内情を後世へ伝
えようとしたのであろう。
まかりまちがえば、身を滅ぼすことになっ
たかも知れないのである。

＊

また、紫式部は、口源氏物語は、
源氏物語は、
神代以来この世であつたことか、日本紀
などはその一部分にすぎなくて、物語の方
で、
正確な歴史が残っているのじゃないか
と、源氏にいわせたい。
紫式部は、何を言いたかつたのだらうか
るほど、明確に知ることには出来ない。
もし、かしたら、紫式部は、
日本書紀等書き綴られてゐる記事の多くが
作偽的なものであつて、
真実の歴史は一部分
にすぎず、物語（ちよつとしたつまらないは
なし）の中にこそ、
正確な歴史が残っている
場合が多い。

H 11. 12. 19 (H 29 (2017) 19. 14 (土) ~ 10. 20 (日))
H 9. 6. 22 (令和元 (2019) 11. 4 (火) ~ 11. 8 (木))
H 6. 2. 11 (金)

4元 7/8 (生) (金)

5,315^P

とまじ
戸惑う
元 1617 抄 2292^D
「1107」 5382 9/9 同文

と見ていたのかも知れない。
天の羽衣・因幡の素戔等のことだろうか。
* 浦島太郎・桃太郎。

* には、
本当の意味での真実

察するところ、
日本書紀などの歴史書

は、
ほんの一部分しか述べられておらず、

先祖代々大切にされてきた我が国の歴史のほと

んどが書き改められ、あるいは抹消されてし

まったのであろう。
故あって

人々は、
これまでの扱を失い、戸惑うたに相違ない

そして、
古を語る時には、まわりの目を気に

しなければならぬ。
息苦しい時代が続いたと考えられる。

だがともあれ、
特に大きな障害もなくつ

いに朝廷は思うところを貫徹すること加出来

た。
こうして

つまり、
真実の我が国の歴史を知る者は、

誰一人いなくなってしまうた。

そのために、
よくぞまあこの難事業を

遣り遂げたものではある。

それには、
当時の日本の支配階級が

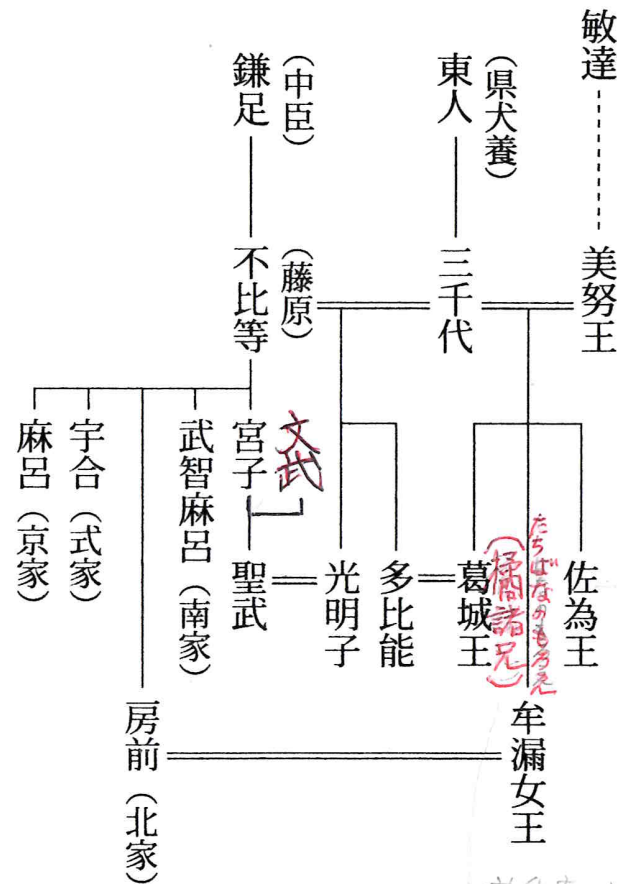
多岐にわたる。

326

99

5,316^P-2/3

148G 中心3.7かけ
 ・右頁の右上 (1/4頁) に、はみ出て、第56表 聖武天皇・光明子を中心とする系譜
 大きく掲載下さい。



・ 叔父略の系譜は
 (由357/2-1/3
 名巻本の系譜)

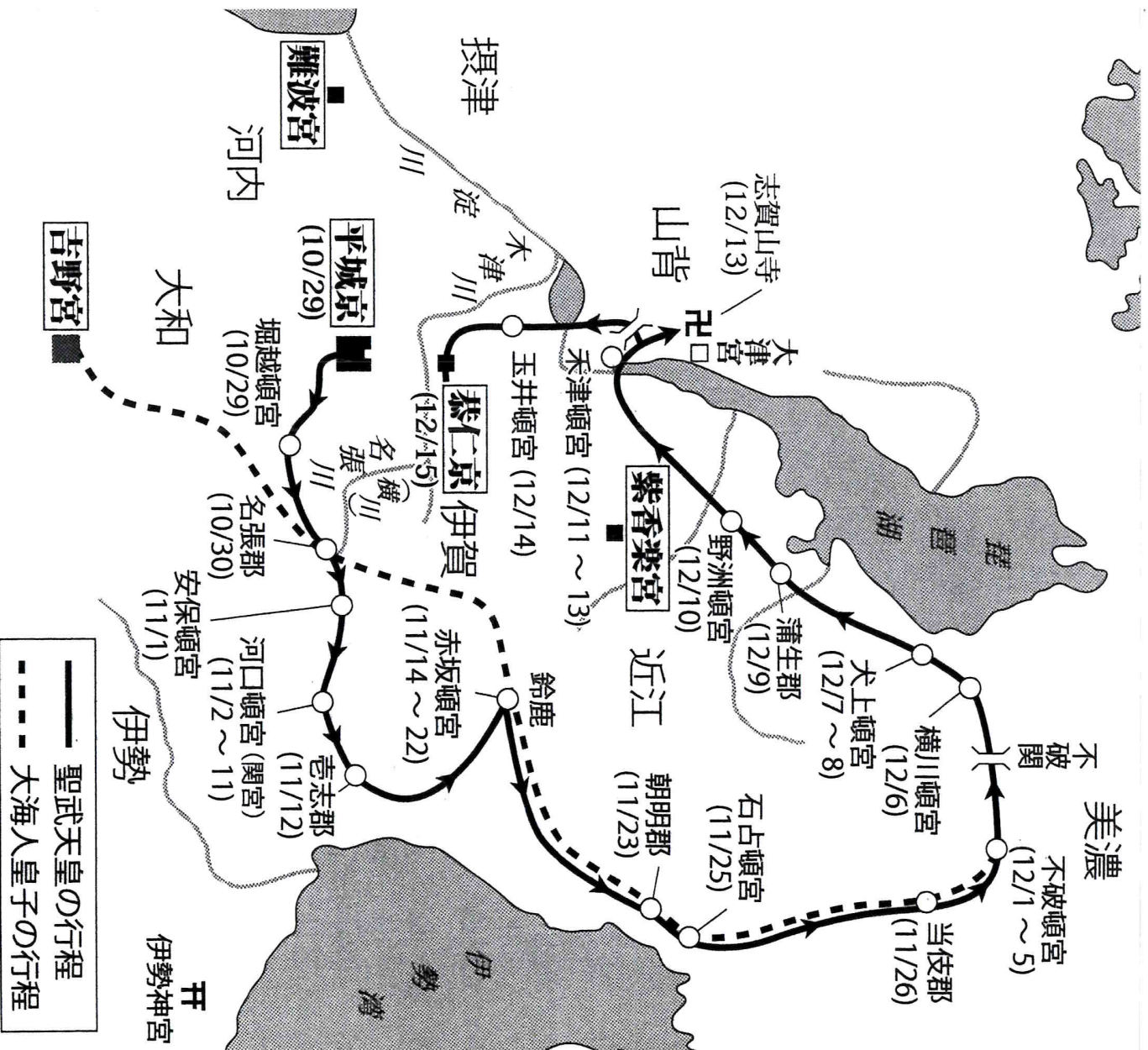
130G

こうみょうこうこう たきなみさだこ
 『光明皇后』 瀧浪貞子

中央公論新社、2017年10月25日発行、6頁参照

・右頁の（前表の下に、
大きく掲載下さい）。

5,316^p - 3/3



13aG
14aG
536
聖武天皇の東国行幸
光明皇后 瀧浪皇子 中央公論新社 2017年10月25日発行 148頁参照

小部小の改訂 日輪 561696P
254Pの後 大日如来(日の神) 262P
5320P

読売 日本(2)-163P
小林 160P 神明 天地の神聖や人間の霊魂
5.317P

57
5312P
5326P

読売 日本(2)163P 朝日 560.12.2付
神仏のP 301P 「信楽」
5320P 10行 読記(向) 2-152P (録) 2-387P

大仏造立

聖武天皇の天平十三年(七四一)三月二十

四日 国分寺建立の詔勅が出された。
なお、造立された国分寺には、釈迦像が奉

安せられる。さて、日大神宮諸雜事記に という伊勢神宮

の記録によると、
聖武天皇の天平十四年(七四二)十一月

三日 橘諸兄は天皇の御願寺建立(国分寺

建立)の成功を祈る為、日伊勢神宮

に参拝した。
その後の十一日の夜、天皇の前に玉女

(太陽神である天照大神か)があらわれた
玉女が、金色の光をはなち

日本朝は神国なり、神明を欽仰したてまつ
るべきなり。日輪(太陽)は大日如来(日の

神)本地は盧舎那仏。衆生はこれを悟つて

小部小の改訂
254Pの後

光明皇后 153頁上因字
176頁

神.仏の歴史(1830)
「ヒコウ」 5283
5343

日本の歴史 読売162

5.319P

読売(2)162

いんてない

聴せし
と述べ、直接人民の力を借り、人民をこの事業に結びつけようとしたのだった。(「日本の歴史」(2)読売新聞社、一五四〜五頁。一六三頁参照)
米
「仏教伝来」(五三八年および五五二年)以後、日神と日仏との関係について、矛盾を感じた者も多かったであろうが、しかし、長い年月がたつうち、極めて自然に融通をきかせ、神と仏を共存させ、あるいは互いに連結させて、ちぐはぐな感情もなく信仰するようになったようである。
ところで、大仏とは、光明遍照の盧舎那仏(太陽神に基ついて考え出された仏)のことである。

遍満 小鉢 9ヶ3
(いちめんに残っている)

小野町 254 小野町 大田の変化など

本身

念仏大仏 94° P 紀上334° 6人 10人
神仏の戸籍(3A-30) 「海」もある

紀小73°
紀上104°

5,322°

裳のすそを縛って袴にしたて、背には鞆を負
い、弓彌をふりたて、剣の柄を握りしめて
力強くこを踏み、雄語の声をあげ、素衣
鳴尊に面と向かつてなほり問われたのだ
た。

さらに神功皇后は、檀日浦(香椎)の
海に髪を入れてすすいだのち、髪を結い
分け、髪にされたであつた。

この当時の人々は、

聖武朝当時

天照大神の本身は、なるほど、盧舍那
万物を照らす太陽神なのであろう
と領いたように想像される。

*

紀上104°
7人

いつた人中断していた大仏の造営は、聖武天皇が平城京へ帰ってこられた天平十七年（七四五）に再開された。

八月に、聖武天皇・光明皇后は、宮人達加、土を運び大仏の座をつき固めた。

「聖武天皇は、自の袖に土を入れて運びました。」

といゆ水でいる。鑄造が始まったのは天平十九年（七四七）九月で、たびたび鑄損し、八度目に成功した。

その水は、鑄造作業をはじめめて二年後、孝謙天皇に譲位して三ヶ月後の、天平勝宝元年（七四九）十月二十四日のことであつた。

いに、大仏本体の鑄造が終つた。（日）

本の歴史（2）飛鳥と奈良、読売新聞社、一五九頁。「奈良の大仏」香取忠彦、草思社、六〇頁参照）

もつともこの時、大仏は土の中に埋まつて

いたので、人々の目には、ただの小山が見えるだけだつた。

盛り土と鑄型が上から少しづつ、くずされてゆく。銅が流れ込んでお

5,324^P-1/5

銘明和

④ 3301^P-3/3
39巻 327頁

らす^す ~~新~~^{あら}で大きな穴^{あな}とな^なつて^てい^いる部分^{ぶぶん}には^は下^{した}
その場^ばであ^あら^らた^たに^に下^{した}銅^{どう}が^が流^{なが}し^して^て入^いま^ま小^こた^た。
こ^こう^うし^して^て大^{だい}仏^{ぶつ}は^は上^{うへ}の^の方^{ほう}か^から^ら徐^{じゆ}徐^{じゆ}に^に姿^{すがた}を^をあ^あ
ら^らわ^わし、^{ぜん}全^{ぜん}体^{たい}の^の姿^{すがた}が^が見^みえ^えら^ら小^こた^たの^のは、^とその^{その}年^{とし}
の^の十^{じゅう}二^に月^{げつ}は^はし^しめ^めこ^ころ^ろで^であ^あつ^つた。
大^{だい}仏^{ぶつ}香^{かう}取^と忠^{ちゅう}彦^{げん}、草^{そう}思^し社^{しゃ}、六^{りく}〇^〇頁^{へい}参^{さん}照^{しやう}）
第^{だい}420^{しう}図^ず 奈^な良^らの^の大^{だい}仏^{ぶつ}が^が銚^{しやう}型^{がた}の^の中^{ちゆう}か^から^ら姿^{すがた}を^を現^{あらわ}わ^す。

*

タ11-11 3894¹・3895¹ 奈良の大仏
3896¹ 1/2

奈良の大仏
周尺 3895¹ 2行
3896¹ 1/2

5,324¹ - 2/5

けっか 結 跡 跡 1株 938¹

3895¹
3896¹ - 1/2

■ 奈良では参考迄に「奈良の大仏の寸法につ
いて見てみよう。
■ 「仏（釈尊）の身長は一丈六尺 あったとさ
れ、一は一は仏像（立像）はこの大きさに作
られる。ただし、原則として結跡跏趺坐の姿に作
るのでその座高は八尺ないし九尺（身長の約二
分の一）が標準である。
とIIう。へ「広辞苑」へ丈六✓参照）
■ なお、華嚴經の教えでは、十が無限を意味
するのから奈良の大仏は丈六仏の十倍の高さ
に作られたとになつたようである。
● また、天平時代には、ふつう唐尺（一尺は
現在の尺の九寸七分リ約二九・六センチにあたる）
を採用してゐたが、大きな仏像の製
作には、古代の周尺が用いられた。
● そして、奈良の大仏は、この周尺によつて
作られた。
とIIわれてゐる。「奈良の大仏」香取忠彦、
草思社、一五頁、八八頁参照。第七十四章
八法隆寺の本尊薬師如来像完成の項において既述
■ 一方、大佛殿碑文・七七大寺日記に

$$\frac{1592}{29.6} = 53.7837$$

版 13分

$$5,324^P - \frac{3}{5}$$

身長 155 cm
足長 90 cm
① 1435^P

160 cm
70 cm
(小きき)

東大寺辞典 298^P 401^P

記されている二の頁17分

は、奈良の大仏について、

「高さ五丈三尺五寸。一一一！膝厚七尺。足

下一丈二尺。銅座高一丈。石座高八尺」

と記載されている。（「東大寺辞典」平岡定海

東京堂出版、二九八頁、四〇一頁参照）

■先述のように、周尺の一尺として、二二三

「二二・五セ」一九・九セ」などがあつ

た。↑↑↑（第二十章八尺✓の項において既述）

■奈良の大仏の身長（一六〇尺の立像）は、**最も数値が**

小さい「周尺の一尺一九・九セを採用」

$$\wedge \text{一九・九セ} \times \text{一六〇尺} \parallel \text{三一八四セ} \wedge$$

である、と想定されたのだろうか。

●奈良の大仏の**座像**の高さは、その二分の一

$$\wedge \text{三一八四セ} \div \text{二} \parallel \text{一五九二セ} \wedge$$

に作られ

●従って、唐尺（一尺二九・六セ）に換算して、

$$\wedge \text{五丈三尺余} \wedge$$

と記されているのであろうと考えられる。（「奈

良の大仏」香取忠房、草思社、十五頁、八八

頁**参照**）

■なるほど、**我国**の古代尺であつたと想像さ

5丈3尺余

$$\text{① } 5324 \div 5$$

1580 cm (天平時代)
1498 cm (現在)

674

①

座 小仏357分

れる。《周尺 二二・五寸》は、奈良の大仏製作時に用いられたものであつたのかも知れない。
・ かしともあれ、奈良時代に「周尺」が使用されたようであり、~~非常に~~興味深い。

■ ~~「周尺」~~ 周尺に「一」でも、奈良時代に、一体どうしたわけか「周尺」が採択されたのだろう。

・ いうまでもなく、~~突然~~ 千年も昔の周の尺度を採用する

ることになつた筈はあるまい。

と観察される。

周尺は、我国にも大陸で絶えることな

く用いられた。現代において種々の尺度

の間で、二種類の周尺

が用いられた。二二・五寸と一九・九寸

が使ひ分けられ、使用されたのかも知れない、などと想像される。

＊

H30(2018)11.25(日)~11.26(4回)
令和(2020)6.29(A)~7.2(4回)

OK 5324-3/5 13行
坐高の高さ
1592cm 5,324-5/5

さいごう 小林
再造 123P

OK 前々頁 13行 1592cm

1/2 1/3
6/30

米

草思社、八八頁参照)
どの数値が正確なのかは、
分からな

であるともいう。(「奈良の大仏」香取忠房

(口) 現今は、一四九八セ

一五八〇セ

天平時代は、五丈三尺五寸×二九・六セ

もつとも、奈良の大仏の高さ(座高)につ

出版、四〇一頁参照)

という。(「東大寺辞典」平岡定海、東京堂

一六〇〇セ)云々

現代の大仏は、その高さは一六

は、ほとんど原形のままであるように思わ

のである。ただ大仏の胸から下部にかけ

て、現在の大仏は、元禄時代に再造されたも

て、このわけてい

さらに述べると、奈良の大仏につい